慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十二年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第三三三号）

目次

信ずるほかに別の子細なき也……近角常観……(1)
彼岸と此岸……高千穂徹乗……(5)
一道会の記……榊原徳草……(10)
スイスの真宗教会……渡辺顕信……(15)
念仏詩抄……木村無相……(19)
生死厳頭を照らす光……花田正夫……(22)

第二十九巻　第三号

信ずるほかに別の子細なき也

近角常観

「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの御せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」と。いやしくも歎異抄をひもとく人は必ず深く心に刻みて忘れられぬ言である。現代の人にして親鸞聖人を渇仰し、真宗を味わう人にとっては熟読反覆して、とてもとても汲み尽くせぬ信仰の泉の源である。而して老翁老媼も、田夫野人もみな共に其味を同じゅうしその喜びを共にする点である。大小の聖人、重軽の悪人みな同じくひとしく選択の大宝海に帰して念仏成仏すべしとはこの事である。

歎異抄を読めば何人も了解しやすいが、これと全く同様の意味が明らかに教行信証に於て告白なされてある。行巻に「選択本願念仏集（源空集）云、南無阿弥陀仏、往生之業、念仏為本」と、三選の文だけを挙げられたのみで、其他の一文一句をも挙げてないのが、即ち、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとの法然聖人の仰せである。ただとは選択である。弥陀にたすけられまいらすべしとは本願である。その選択本願が即ち南無阿弥陀仏である。歎異抄の前の文に、念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんとこころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんはおおきなるあやまりなり、とあるのが、即ち往生之業、念仏為本である。よきひととは真の善知識、法然房源空聖人である。

以上の様に頂いてみれば、歎異抄は実に教行信証にあらわれた親鸞聖人の御自督（ごじとく）を聖人の御口から直々告白して我等に知らして下さったお教化である。教行信証は固形体であるからこれを溶解して液体とし、我等に飲み易く、味わい易くして下さったのが歎異抄である。否、教行信証が漢文であるために我等は固体形のように思うのがそもそもの誤りである。教行信証も歎異抄もつまり筆に口にあらわれた聖人御自督の告白のそのままである。

選択本願念仏、即ち、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとの、真の知識の仰せを信ずるほかに別の子細なきなり。和讃に曰く、

諸仏方便ときいたり、源空ひじりとしめしつつ
無上の信心おしえてぞ涅槃のかどをばひらきける
真の知識にあうことは、かたきがなかになおかたし
流転輪廻のきわなきは　疑情のさわりにしくぞなき

実に源空聖人は、如来の選択本願を日本一州に開闡（かいせん）すべく出現したまうた善知識である。源空聖人それ自身が選択本願の体現である。専修念仏の実現である。

そもそも信ずるほかに別の子細なきなりとの絶対の信仰の起るのは決してつとめて起るのではない。起らねばならぬ或ものがあるからである。信ぜねばならぬ本願力を教えたまうたからである。信ぜざるを得ぬ本願力を体現したまうたからである。

執持鈔（しゅうじしゅう）に曰く。故聖人の仰せには、源空があらんところへゆかんと思わるべしとたしかにうけたまわりしうえは、たとい地獄なりとも故聖人のわたらせたまうところへまいるべしとおもうなりと。そもそも法然聖人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候という確信は、如何にも絶対の信仰にして一点の疑の存せない態度は渇仰すべき至極であるが、単に師匠を信ずる道徳的服従として感ずべきではない、つまり如来の本願を信ずる信仰的態度の実現である。もしこれを道徳的服従として感じる人は、源空があらんところへゆかんと思わるべしという教訓は、無遠慮な命令と云わねばならぬ。然るに信仰的としては、この無遠慮な教化自身が、即ち絶対の信仰を起こして来る所以である、これ即ち本願力のそのままを実現された絶対の力ある教化である。

源空があらんところへゆかんと思わるべしとは、何はともあれ、道理や理屈を考えるな、結果の如何を心配するな、この源空は四十三の年に至るまであらゆる行を修し、あらゆる戒を持し、あらゆる実験、あらゆる研究をして来て、何等の効がなかったので遂に、一心専念弥陀名号の文を見るに及び、はじめて順彼仏願故の文字によって如来の本願を見出し、選択摂取の本意に順じて、ただ念仏するの他なし。これ源空の信受し奉行（ぶぎょう）するところである。我と同一念仏の人々はわがまいらんところへまいるべしと思うべし。薬なるか、毒なるか、我がかくの如く自用するにて明かである。汝等決して危ぶむな、恐るるな、我とこの如く運命を同じゅうすべしと。

これ法然聖人の自ら信じ自ら行い、自ら教えたまいしところ、この様なお教化をきけば、念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり、たとい法然

聖人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候の信仰が起らねばならぬことになる

さて、法然聖人のこの力強いお教化の起ったのは、本願力そのままの実現である。汝一心正念にして直に来れ我能く汝を護らん、すべて水火の難に堕することを恐れざれ、そのままの実現である。詳言すれば、地獄必定の我等に対して汝一心正念にして直に来れ、我能く汝を護らんとの、本願招喚の勅命である。その勅命のままを信じ且つ教えたまいしお教化が即ち、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとのお教化である。源空があらんところへゆかんと思わるべしとの仰せである。本願自体が普通尋常のことでない、地獄一定のものを救わんがためである、若し我が浄土に生れずば正覚をとらじとの誓である。この本願力に遇うときは空しく過ぎる者はないのである。地獄におちたりともさらに後悔すべからず候という、能（よ）く速に満足せしめんの声が出て来るのである。この言は覚悟をきめて力んでいう言ではない、お慈悲に満足して我身の罪悪の深いことが気にかからぬようになった所である、大満足の告白である。

「そのゆえは自余の行をはげみて仏になるべかりける身が念仏を申して地獄にもおちて候わばこそすかされたてまつりてという後悔も候わめ、いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」これ実に選択本願が真に聞き開かれた信心である。我身の価値なきことを自覚した信相である。そもそも選択本願の本意は、何れの行もつとまらぬものをたすけんとの大慈悲である。自余の行のはげみ得ざる者に与えんとの念仏である。即ち地獄一定の者を救わんための本願が、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしの勅命である。故にその本願に遇い奉ってみれば、我こそは自余の行の及ばぬ者である、否地獄一定も気にかからず、地獄におちても後悔をせぬのである。

執持鈔に曰く、このたびもし善知識にあいたてまつらずば、われら凡夫かならず地獄におつべし。しかるにいま聖人のお化導にあづかりて弥陀の本願をきき、摂取不捨のことわりをむねにおさめ、生死のはなれ難きをはなれ、浄土のうまれ難きを一定と期すること、さらにわたくしの力にあらず、たとい弥陀の仏智に帰して念仏するが地獄の業たるをいつわりて往生浄土の業因ぞと聖人さずけたまうにすかされまいらせて、われ地獄におつというともさらにくやしむ思いあるべからず、その故は明師にあいまいらせでやみなましかば決定悪道にゆくべかりつる身なるがゆえにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて悪道へゆかば、ひとりゆくべからず、師とともにおつべし。さればただ地獄なりというとも故聖人のわたらせたまうところへまいらんとおもいかためたれば、善悪の生所わたくしのさだむるところにあらず、というなり。これ自力をすてて他力

に帰するすがたなりと。

噫、地獄一定の我等を救わんとの本願力である。法然聖人がこの本願のままを信じられた有様が、御身にあらわれて、源空があらんところへゆかんとおもわるべし、との教化となったのである。この御教化に遇うてみれば信ずるほかに別の子細なきなりである。信じて満足された有様が、法然聖人にすかされまいらせて地獄におちたりともさらに後悔すべからず候である。何となればもとより必定地獄におつべき身で、行く先は法然聖人のわたらせたまう所へまいるのである。地獄であろうと、浄土であろうとも、総じてもて存知せぬのである。唯本願力を信ずるばかりである、地獄必定の我等を救わんとの本願力を信ずるばかりである。もし地獄必定の我等往生を遂げがたかるべくば、願は徒然であり、力も虚設である。然るに願力成就して、正覚せられしより既に十劫の間、我等を待ちたまう、法然聖人は経を読まれて凡歴（ぼんりゃく）十劫のところに感泣したまうたときく、即ちこの本願を示し給うのが法然聖人の御教化である。

親鸞聖人が法然聖人から真影を附属された御文にも、

「当（まさ）に知るべし、本誓重願虚しからず、衆生称念すれば、必ず往生を得るなり」

とのたまう。してみれば選択本願念仏集の附属の御文のように

「南無阿弥陀仏、往生之業、念仏為本」

即ちただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなりである。これ即ち聖人御自督の告白にして、我等がまた同一念仏して別の道なき大信海である。親鸞聖人はこの御自督をもって大経流通（るつう）の文をお読みなされて、これを和讃に告白されてある。曰く

○善知識にあうことも、おしうることもまたかたし
よくきくこともかたければ信ずることもなおかたし
○一代諸教の信よりも、弘願の信楽なおかたし
難中之難ときたまい、無過此難とのべたまう。
○念仏成仏是真宗、万行諸善これ仮門
権実真仮をわかずして自然の浄土をえぞしらぬ
○聖道権仮の方便に衆生ひさしくとどまりて
諸有に流転の身とぞなる悲願の一乗帰命せよ

念仏成仏是真宗とは、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしである。悲願の一乗とは、選択本願念仏である

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

彼岸と此岸

―浄土は現世を照らす光の根源―

高千穂徹乗

私は先年、本願寺派の伝道部発行の『真宗の書』の一巻として「病床の人々におくる」という一文を書きました。その後各地の病院に療養している人や、未知の法友から沢山のたよりを頂き、法味愛楽（あいぎょう）の機縁を恵まれました。そのなかに山口県の未知の人から次のような手紙を貰い、強く胸をうたれました。

「私は本年六十七歳の老人でございます。昨秋「病床の人々におくる」というパンフレットを読んで、先生が発声不能になられたことを知り、私は非常に胸をうたれ、文字通り満腔の同情を申上ぐると共に、もしこれが自分の身の上だったらと寒心にたえないものがありました。ところが今度は私が発声不能の不具者となり、悲観のドン底に投げこまれ、無意味な人生をよぎなく生かされている現在でございます。本年二月末より発声が困難となり、いろいろと治療に手をつくしましたが、最近になって胸部の最上部に腫物があることがわかり、声帯マヒの原因もここにあったのであります。いずれこの病気で命をうばわれるものだと覚悟しております（中略）

実のところ最期は願力の不思議で、このまま浄土に参らせて頂けるのだと安心しておったようでありますが、入院中に私の年頃の者が二人まで食道ガンで亡くなり、死の五六日前から非常に苦しんで死にました。その実際を目撃し死の不安と同時に後生の一大事に不安を生じ、こんな筈はなかったと、大いに狼狽し血眼になってお聖教や和上方の法語など読んでおりますが私の物となりません。

すべて仏にまかせた以上、つまらない手もとの詮議はいらぬと聞かせてもらっておりますが、とにかく死に直面し、往生安堵のおもいのもとに参らせて頂きたい、今の私の心中にこれ以外はないのであります。お叱りを受けるかも存じませんが、どうしても往生安堵の思いに住したい腹一ぱいでございます。一面識もない先生に、あつかましいお願いでございますが、ふびんとおぼしめしてお指導下さるよう、ひとえにお願い致します。

この老人は仏縁の深い家に生れて、今日までご法の会座にも連なり、自分でも信心を獲ていると思っていたのですが、いよいよ自分が死の壁につきあたってみると、摑んでいた信心がこわれて、不安な気持になったのであります。私も若い頃にこうした苦しみを経験したことがありますので、ひと事とは思えない心の痛みを覚えるのであります。

私達はつねに快楽を追求していますが、同時に必ず「死すべき者」という大限定に直面します。そしてこの「死」に直面する時「生きる」ことについて深く考えるようになり「死」に向かい合って、まことの「生」の意義が明らかにされます。武者小路実篤氏の創作『愛と死』のなかに記してあるように、人生は無常であり、悲惨なことはいくらでも起りうることを理屈では知っていても、自分がそのような目にあうということを、直面するまでは思わない。平生の日暮しに私達は自分が死に近づきつつあることを忘れています。私達はいつも生きることに一生懸命になっていますが、生きることは、そのまま死に近づいていることで、生と死とは裏と表のように一体であります。然るに私達は多くの場合に、この二つを別々にわけて、ただ生きることだけに夢中になり、ただ死ぬことだけを心配しています。

まことに私の存在は、その一分一秒が、死に直面している生死的存在であります。真実の宗教は、この生死的存在としての私の苦悩を解消するのであって、単に生きることだけのために利益を興えるものではなく、また死ぬことの恐ろしさだけに力を与えるものでもありませぬ。生と死を一枚のものとして、生の依るところ、死の帰するところを明らかにするものであります。

私の現実は生死流転であり、私の存在は生死的存在でありますから、この生死流転をたちきる力は、現実の私には見出し得ないわけです。まことに生と死とは苦悩となって私の上に覆いかぶさっています。さらに私自身は真実にそむくように運命づけられ、私の日常生活は悪と罪とを中軸として動いているのであって、まことに救済の縁のない身であります。

およそ宗教の信念というものは、私達の心のむきをかえその生活の方向を転ずる事実であります。今までは自分のこと、この世のこと以外に離れることのできなかった私が他人のこと、あの世のこと、人間以上の尊い世界に心をむけるようになるのが宗教の体験であります。

私共がよいかげんな気持で、毎日を過している間は少しも気になりませんが、いろいろの災難や苦難につきあたり行き詰った破目になると、自分全体を投げ出すよりほかはないのであって、この行き詰りを切り開いてさらに新しい力を与え、前途に光を点ずるものは、この世の力ではなく

あの世の光であります。私達はこの光に照り返されて、自分の姿をみかえし、仏様の願力にまかす他に道はないのであります。

仏様の浄土を、麗しい七宝荘厳の世界と説かれても、私達は到底その形相的世界を視覚することは出来ません。念仏とは、私が仏を念じ、浄土を観ずることではなく、私が仏の本願に遇い、仏の名号を聞信することによって、深い自己内省と、それにもとずく生活態度の転換を体得することであります。それはこの世からあの世へでなく、逆にあの世からこの世への道が開かれることによって、彼岸の浄土が現世を照す光の根源となるのです。即ち現世は、後世としての浄土をもつことによって、真実の現世となり、その浄土は常に私達に働きかけ、現実を解決する力となるものであります。

浄土真宗の信心ほど易いものはなく、またこれ程難しいものもないようであります。何故に易いかといえば智恵もいらず、修行もいらず、ただ仏さまの仰せに従い、そのはからいにまかせきって、ご恩を喜ぶだけで救われるからであります。然るに何故にそれが難しいかと云えば、私のこざかしい分別の心は容易に抜けがたく、自力の執心をとりさることは、極めて困難であるからであります。

信ずる一つと聞くと、その信じこころにとらわれ、両手を放してまかせよと教えられると、どうしてまかせようかとりきんでかかり、両手を放したらあぶないように考えてどこかで私と仏様とのつながりを見つけようとあせるのであります。

大きなつなみのあとに残っているものは天上の月ばかりといわれるように、すべてのものを洗い流したあとに、月の光が照り輝いている風情を宗教体験の極地とたたえられます。私達が聞いて聞いて聞きぬくところ、いつの間にか仏のはからいによって、私のはからいが打ち砕かれ、疑うすべもなく、はからう力もつきはてて、ほんにこのままのおたすけであったかと、ほれぼれと願力にまかせ、念仏申さんと思い立った時、仏の名号が私の信となり、念仏とあらわれ、拝む手となり、たしなむ心となって下さるのです

私のように真宗の教義を幼い頃から修業させられた者は自分の理性によって教義の型のなかに、自分の心をあてはめ、自身で造りあげた仏像の前にぬかずいて、ほのかな喜びを感じ、一時の平安をむさぼっていたこともありました

然し砂上に建てられた家は、少しの風にも基礎が動いてくるように、自分の理性によって構成した偶像は、いつか自分の理性によって破壊されるときが来ます。私は、こわれはてた信心の殻を胸に抱いて、京都の高徳を尋ね、奈良の念仏道場を巡歴して、素純な村人の法悦の姿に接したのですが、自分のはからいで造りあげた信念を捨てきることは、なかなか難しいことでした。しかし高あがりのした私

の心に、きびしい痛棒が加えられ、すべてのはからいが打ち砕かれて、すなおに仏様の慈悲を領納せずにいられない時が到来しました。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを助けんと思し召し立ちける本願のかたじけなさよ。（歎異抄、結文、常の仰せ）

と感謝された親鸞聖人の深い体験や、法然聖人が、長い求道のあとで「予が如き下機の行法は、法蔵因位のむかし、かねてさだめおかるるをや」と随喜されて、高らかに念仏されたという転心の事実は誠におごそかなものであります

思うに宗教は、現実の自我に行きづまり、苦悩の人生に浮沈するものが、現実をこえて、更に現実を生かす絶対統一の世界に参徹する体験であります。ここに徒らに現実を追い、現実に疲れた私が、心を転じて絶対の世界と永遠の生命とを専念するところに、宗教への道はひらかれるのであります。

私が静かに反省の眼を内に向ける時、そこに永遠に暗黒な自己の姿を見出すのであります。それは単に道徳上の罪とか、社会的な禍というものに関する苦悩ではなくて、私自身が亡ぼされ悩まされているところの、自我そのものの悲しい運命としての苦悩であります。然も私はこの自我崩壊の苦境に沈みつつも、それに対して何等の力を加えることが出来ない。私はそこに私の意志の極限と、思惟の行き詰りとを感ぜずにはいられないのであります

この世の人たちは、みんな各自が担（にな）わねばならぬ業苦をにないながら生活を続けているのであります。まことに業苦とは私自身がいやでも担わねばならぬ業苦です。然し荷物と云えばすぐにも肩からおろされそうですが、この重荷は私がかついでいる荷物ではなくて、実は私自身なのであります。罪や悩みや、分別やはからいなど、これらは皆、我欲と我慢と我見とによってうまれたもので、すべては私の「我」にもとずくものであります。

それなのに私は自分の我性に気づいても、むしろこれをかくそうとしたり、ごまかそうとしたりして何時までも「我」をたよりとし、たのみとしていますので、どうしても我をすてきることはできないわけであります。

しかるに私が自分の意志や理性や権力などをもってしても、どうにもならぬギリギリのところに行き詰り、私のたのみとし、たよりとしていたものがすべて空しく消えうせて、私の分別や、はからいが、みんな打ち砕かれる時、私は自分自身を投げ出すよりほかに道はないのであります。

親鸞聖人の常の仰せ「さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思し召したちける本願のかたじけなさよ」と感泣されたのは、すべての業苦のあるだけを仏にまかせ、重荷をおろして楽々とした法悦の境地を示さ

れたのであります。本当に私達は、めいめいの宿業に泣かねばならぬものですが、その悲しい宿業に泣いた涙のなかにも、ニッコリと微笑むことの出来る人は、幸せな人であり、恵まれた人であります。

聖人は『教行信証』に涅槃経を引用されて「もし善男子善女人ありて常によく心をいたして念仏するものは、もしは山林にあれ、もしは聚落にあれ、もしは昼もしは夜、もしは坐もしは臥に、諸仏世尊つねに此人をみそなわすこと目の前に現ずるが如し」と記されています。念仏よろこぶ人を佛様は常に護念されているので、いつでもどこでも守りずめに守られて、仏様と二人ずれであるのです。

念仏とは仏の名号を称えることで、これほどたやすい行法はないのですから、弥陀の本願に私達が往生する行として選びとられたのであると法然聖人は教えられました。しかるに私は病気で声帯を切除したために、このたやすい念仏さえ称えることが出来ない身体となりました。手術のあと十余年の月日をすごし、いろいろの不自由にもなれてきましたが、年をとるにつれて、淋しく思うことは声を出して仏の御名をよぶことが出来ない、大きい声でお経を読むことも出来ないことであります。

そこでもし名号を称えねば助からぬ、念仏せねば浄土へ往けぬということなら、私の様な声の出ない者は、どうしても救われぬことになります。そこで親鸞聖人が弥陀の本願に乃至十念と示されて、一生の間の念仏から、十声一声の念仏にいたり、一声も称えられぬものは、一念の信心のみによって浄土に生れさせて頂くことを、ねんごろに説き示されてあります。このお教示によって私ごとき者も廃残不具のままに、仏様の慈光に摂めとられるのであって、私はこのたび病気により、自分の宿業の深い事を悲しむにつけても、仏様の大願業力の広大な事をいよいよ有難く頂いています。この頃の激しい世相の波にもまれて、多くの人々は、徒らに眼前の名利に心を奪われ、我見と我執と我慢のひぐらしをしています。このあたりで私達は我武者羅に暴走することをやめて、静かに自らを省み、正しい人間の姿を求めて「人生いかに生くべきか」という根本の課題について深い思いを巡らすべきではなかろうか。

一道会の記（続）

榊原徳草

次ぎに田村実造先生のお話を記します。

御指名にあずかり、おこがましく座らせて頂きました。私は一道会には仲々御縁がなくて二三度位しか出席せず、しばらく欠席を続けました。私の仕事は歴史の方で十一月には京都で種々な学会がありますので、幹事役をしており準備に忙しく寄せて頂けませんでしたが、今日は池山先生をはじめ松本解雄先生のご供養もあるというので出てまいりました。

松本先生とは五十年近く前からお付き合いを願っており先生と私との関係を申しますと、昭和三年頃でしたか、ここに居られる宮地廓慧先生等と知四明寮という仏教の寮がありそこに居りました。或日のこと寮の門先に出ていますと、後で判りましたが、松本先生で、「この寮は仏教の寮ですが私も入れて貰えませんか」と言われるのです。その時、たまたま部屋があいているのを知っていたので、案内して寮長の羽渥了諦先生にお引き合わせして入寮が決り、一緒に生活し特に親しくお交り頂いて居りました。

又、先生のお導きで、念仏は善知識によらねばということを漸く気付かせて頂いたという深い関係であります。お卒業後も時々お会いしておりましたが、お亡くなりになる一年前、先生は松山大学を定年で退かれ、高松の短大の方に居られ、私も故郷へ帰ることがあって、その時、高松でお会いする事になって、一時間近くも待ったがお会い出来なかった。またの機会をと思っていたところ急に亡くなられたのであります。幸に私共は念仏により倶会一処と申しますか、有難いことですが、然し私共は姿でお会い出来ないとそういう気持になれない。今日は計らずも先生のご縁に遭わせて頂き、有難いことです。

先程から歎異抄ということがしきりに出て居りますが、この歎異抄と私との出会いは五十三、四年になると思います。私がまだ旧制高等学校の一年の時、仏教というものを

知らなかった時で、仏教青年会で歎異抄を読ませて貰ったのです。これも不思議なご縁でそこへ導かれて出た時、三十名位の輪読会で、何が何だかすこしも解らない、仏教の特殊な言葉がわからない、それで解説書によって漸次解ってきたということです。

歎異抄に一番引かれたのは、先程御院主が読まれた中の「善人なおもて往生を遂ぐ、いかにいわんや悪人をや」これは、何も解らぬ私共でも、妙なことが書いてあると思ったのです。普通道徳では、善人が救われるのは常識ですがここでは、悪人の方が正客になっている、実に不思議な言葉でございました。妙なことが書いてあるなということがそもそもの原因でありました。段々と引かれ、私の方も近づいていったが、然し普通の頭で解釈することで三四年は過して参りました。

その後、有難い善知識に遭いまして丁度それから四十七八年になりますが、今、すこし自分が味わい、気付かせて頂いたことを二三年のうちにまとめてみようかと思っている次第であります。そのことの一つ二つを皆様と共に味わわせて頂こうかと思っている次第であります。

先日、私の居ります京都女子大学の学生達と話をして居りまして、丁度九条武子夫人、私達学生の頃の日本女性の憧れの方であった夫人の歌、

大いなるものの力にひかれゆく　わが足跡のおぼつかなしや

を学生達に話して居りました時、フト歎異抄の九章に気付かされました。大いなるものの力というのは、私なりの味わいですが、お念仏の力に支えられ引かれて過しておるけれども、自分の足跡はおぼつかない、これは「踴躍歓喜のこころおろそか」という気持、喜ばねばならんのがトボトボとおぼつかないのはなせだろうかということを、私なりに解釈させて頂くと、それは私達の煩悩の一面を現わしているのではないかと。九章では「親鸞もこの不審ありつるに唯円房同じ心にてありけり」とあって、それは煩悩のためである、然しその煩悩あればこそのお念仏なのだという裏返しの意味が九條武子夫人の歌にあるのを感じて学生達に話したのでありました。

私、実は歎異抄しか解らんのでありまして、五十余年間を時々一寸開いて読む位のものですが、一二節読ませて貰うと、そこに必ず引っかかるものがあるので、そこを散歩の時、ひまな時に考えさせてもらう。そして何とか解けてゆくと、又次ぎを拝読するということで、先程、歎異抄十章までの拝読を聞かせて貰ったのですが、私が最初に引懸った三章とか、この九章とか、又は二章の「おのおの十余ケ国の境をこえて云々」を拝誦しまして、あれは関東の同行が、まあ信仰に迷いができた、そのため京都の聖人の前に来られた。その同行を前にして「親鸞におきては、ただ

念仏して云々」と、これはどなたもよく仰言ることなんですけれども、それは然しそういう迷いを生じたのでやって来た人々に対して、—私共はよく示談と申しますが、実に模範的な示談ではないか、実に簡結で、相手の胸を刺すような言葉、私などは時々にしろ、或は喜んだ当時には、若いのに失礼をも顧みず、今お話があったように鬼の首でも取ったような気持で示談をした経験がありますが、千言万句、無駄なことを云って、思うことを言い尽せずにしゃべりますが、聖人のあのお言葉は、簡単なままで無駄がない。あれは示談の最初のもので、しかも一つの典型的なものと思うております。

同時に、あれは聖人御自身にとっては、自分の信一念のそこを憶念されている。と申しますのも、私共が喜びまして間もない頃、私共の信と禅宗のそれとどう違うだろうかと、当時、京大の講師していられた久松真一先生、先生は妙心寺に居られて、そこで徹底なさった、その先生に京大の楽友会館に来て頂いて、禅の体験をお聞きしたことがあります。禅宗のお悟りというものは、恐らく私共の信と同じものにしましても、瞬間的永遠、ハッと時間と空間を超えていると申しますが、それはそうとして、その後はどうするか。こうして皆様方と集ってお話を聞く、これも信後の修養で、更に念仏をふかめふとらせてゆきますが、禅では悟後（ごご）の修養というそうです。それは坐禅をして自分が悟った、ハッと気付いたその心境を追求してゆくということです。

実は私、その後京大の文学部につとめまして、久松先生とは先輩と後輩という関係でご一緒して居りましたので、授業の後で雑談の中で伺ったことでありましたが、大体同じようなことを仰言っておられました。

真宗では、信は深めふとらせるためには「聞くにきわまる」というように、それも大事ですが、私は、気付いたその一念を憶念することが大事ではないかと考えるのであります。

さて「親鸞におきては、ただ念仏して」と同行に申されたことは、同時に、かってのご自身が法然上人の導きでお念仏に帰らせられたおこころを憶念されておられるのでないかと拝承するのであります。そこへ立ちかえって居られるということ、その時の聖人の立場に立って仰言っておられるわけであります。

さてただ念仏ということは、それはまた歎異抄一章にかえりますと「念仏申さんと思いたつ心の起こるとき」あれは表であって、それを自分の体験として具体的に現わしているのが二章ではないか。一章は著者の唯円房の考えでありましょうが、あれは導入なり、序説にもあたる。私の経験から申しますと、仏とも法とも知らないとき、歎異抄に出会いまして、第一章は解りませんでした。抽象的に書か

れていて、不思議と云っておっても、解釈は解っても本当の所がわからない。

第一章に一般的に出しておいて、二章からは「親鸞におきては」とか「親鸞も」とか、聖人の具体的なことで証明して言っているような編集の仕方のように思われるのであります。話はそれますが、歎異抄で「親鸞もそうであるが唯円房もそうであるか」と、同行と同じ所に坐っている。私は専門が中国の歴史をやっている者ですが、時々孔子の論語を読みますが、論語は孔子が弟子に向って自分の考えはこうであるといっていることを弟子達が編集したものですが、それを通じての孔子の態度は、常に自分は師匠であるという態度で、それの善し悪しを云うのではありませんが、弟子を師匠として一段高い所から訓えて居られる形であります。ところが歎異抄は、聖人が下までさがって御同朋、御同行と一つになって居られる、そこが論語と歎異抄と違っていると思っております。

さて先程の「念仏申さんと思い立つ心の起るとき」つまり、念仏申す、も一つ前の、そういう心の起ったとき、もう摂取不捨のめぐみをうけて、救われて居るんだということですが、それは大変危険なことで、ああそれではもうそれでいいのだとならないように、二章はあるのではないか、唯念仏してだけれども、その裏はこういうことがあるんだと、聖人と法然上人とのお話をされ、それは阿弥陀仏、釈尊、善導と流れてくるところを述べて居られるのであります。

またそれに関連するんですが「念仏申さんと思い立つ心の起る云々」は真宗学の方だと、廻向の念仏だとなっていますが、御師匠の法然上人は、称名念仏、称える、行住坐臥称える、そうしたらお迎えがあるのだというのが法然上人のお言葉で、そこには違いがあるのでないか、決して法然上人より親鸞聖人の方がえらいということでなく、法然上人の偉いところは、それ以前の仏教界で念仏の有難さを見出された非常な独創的な偉さだと思うのですが、それを堀り下げてゆかれたのは親鸞聖人だと思うのです。ですから聖人は廻心は二度あるというのではないが、ハッと気づかされると同時に、も一つ称名の念仏から廻向の念仏へ、もう一つ突込んだ時期があっただろう。称名の念仏というのはキザな言葉で申したら相対的な念仏で、廻向の念仏は絶対他力的な念仏です。それが歴史の上から見たら何時だろうと考えるんです。

聖人は法然上人によって念仏門に入られて六年間一緒に京都に居られた、その後念仏法難で流罪、還俗させられて藤井善信となられて越後へ、法然上人は四国へ流され、ここで師と別れられる。流される時、親鸞聖人は非常な意気込みで「辺鄙の群類を化せん」と、普通だと歎き悲しむのを喜び勇んで行く。これも話が前後しますが、今から十二

三年前、私共の文学会の十周年記念が新潟で行われ、招かれてまいりました。列車の連絡が悪くて直江津で二三時間待ちました。車で聖人が始めて船でお着きになった浜に行きました。その時にはそれ程に思いませんでしたが、此頃思うのは、京都は其時分でも文化のひらけた所であり、一番辺鄙な越後の浜に着かれる、ご自身は非常な意気込みで京都をたたれて、いよいよ着いて見れば気候も厳しい田舎である。平安時代の末頃であるから、此頃テレビで平将門を見て居られる方はお解りと思いますが、将門の関東よりも越後はもっと厳しい寒村と思います。聖人はその人達に逢われ、そこに六七年居られました。越後では記録の上では念仏を勧められたことは残っていません、活動されたのは関東に行かれてからです。

越後に着かれたのは三十五六才、それから四十二三才まで居られましたが、その時期が聖人の内省の時期、言葉もなかなか通じなかったんじゃないか。そういう状態だったと私は推測しております。自分自身を内省されて信仰を深められたのではないか、それが称名念仏から廻向の念仏へとうつられたのではないかと私なりに推測しております。それを歎異抄一章を読みまして、自分の歴史をやっている立場から考えさせられるのであります。大変お聞き苦しい話をしまして、失礼いたします。

某死刑囚の歌

浅間しや　不取正覚のおん誓　空吹く風と思うことあり

浅間しや　不取正覚のちかいより友の手紙に涙するわれ

高らかに　不断煩悩得涅槃くりかえしつつわがまなこ閉ず

笑うことを忘れはせぬかとふと今日は　おかしきことも

なきに笑顔してみる

○

強盗殺人犯の母の願い

菊地判事の記

こみ上ぐる悲しさ故に悶えつつ

被告の母のおずおずとして

「孝行な子でした」と殺人の被告の母の泣きぬるるなり

「ただ一つ　命助け給えよ」とか細き声に訴うるなり

スイスの真宗教会

渡辺顕信

……先日、山田宰先生の仏訳歎異抄で存じあげましたフランクル氏の記事が毎日新聞に出ていましたのでコピーを同封させていただきました。同氏訳の正信偈、四十二章経、阿弥陀経も購入させて頂いております。

〃人身受け難し、今すでに受く、仏法聞き難し、今すでに聞く〃の聖句が感じられます記事と思いました。

〃聞思して遅慮することなかれ〃の聖句が、痛切に感じられることでございました。

外国人から逆に学ばせられる日本人の典型が自分であったことも知らされました次第であります。云々。

○　毎日新聞　五一・一・一六日

精神的管理を逃れ……スイス・親鸞

スイスのチューリヒ空港に着くと、戦車がパトロールしており、兵士が機関銃を手に目を光らせていた。あとでき

くと、それは戦車でなくキャタピラつき装甲車の一種で、警官隊の巡廻だったらしい。しかしアルプスの山々と湖のある美しい国、そして永世中立の平和国家—そんなスイスのイメージは早くも打ち砕かれる思いであった。

日本の留学生にきくと「スイス人は自分達を守ることに真剣です。大小の公園がジュネーブに沢山あるが、その地下に防空壕が堀られ、医療品と食糧を貯蔵して、要所に病院があり、平穏な今も医師、看護婦が毎日詰めている。欧州の真ん中で生き残ってきた小国の知恵でしょうが、スイス人の性格にもよると思います」とのことであった。

又さらに「スイス人には精神的に閉鎖的なところがあり、信仰はおおらかさがなく厳格です。宗教改革者、カルビンの影響が生きているのでしょうか。宗教はこの社会の動かすことの出来ない規律になっているように思います」

実はこうしたジュネーブに、親鸞を慕うグループがあって積極的な活動しているときいて来たが、最初から手に負えないものにぶつかったらしい。とにかくカルビンにゆかりのサン・ピエール教会の礼拝をのぞいてみることにした

太い石柱に支えられた大きな教会で、内部に入って天井を見上げたが、高さ二五メートルはありそうだ。併し簡素で、絵画、彫刻の宝庫というようなきらびやかなカトリック教会と違い、飾りは殆んどなく、色彩といえば、中央祭壇奥のステンドグラスだけである。

礼拝は午前十時、それまで鳴り続いていた鐘がやみ、パイプオルガンの前奏ではじまった。出席者は約三百人、ほぼ満員。若い男女、子供の姿も見える。寒いので人々はオーバーやコートを着たままである。賛美歌、聖書朗読、そして黒衣の六十年配の牧師の説教があった。

宗教改革で中世以来の教会の支配から人々を解放し、一人一人を直接神に向き合わせることで新たな宗教的情熱を呼び起した。しかしその影響は宗教の世界を超えて自我を尊重する近代人を生んだとも云われる。スイスではなお大半の人が日曜に教会に出るという。だがその半面、その国の社会では、子供が教会に行くのはいい子を証拠だてることになる。兵役義務ではよい兵隊であらねばならぬ。聞けば宗教による精神的管理社会という言葉もあるそうで、そうしたがんじがらめの中で、一部の青年はかなり失望しているといわれる。

サン・ピエール教会の礼拝がどこかよそよそしく、ある冷ややかさを感じたのは、彼らがもつ近代の夢が神とともに色あせているということのためだろうか。

そのジュネーブで、親鸞聖人に熱烈に帰依する「スイス浄土真宗教会」のアンドレ・シュピリエさん（五十一歳）と、アグネス・トネイさん（四十二歳）に会ったのは、カルビンの足跡を歩いた翌日のことである。二人は五十年十月、そろって日本を訪れ、京都西本願寺で得度を受けた。本願寺派では初めてのヨーロッパ人得度者というのでめずらしがられた。シュピリエさんは四年前に事故で両足の機能を失い、車イスの生活。トネイさんは精神科の病院に勤める看護婦さんだが、シュピリエさんの個人看護婦でもある。この日はトネイさんが車イスを押し、約束どおりの時間にホテルを訪ねてくれた。

まず日本での得度の時のことを聞いてみた。シュピリエさんは云う。「親鸞聖人を知ってからの私の信仰は、一度としてためらったり、あと戻りしたことはない。然し暗い気持の時、苦しい時もあったわけです。そういう意味では昨年の十月は明るく輝いた時期でした。私はあの時、日本の権威ある教えにふれ、自分で浄土真宗をうけ容れたなと思いました」

トネイさんは「私は厳格なプロテスタントの家庭で育ちました。しかし病院で日常的な問題である死について満足

出来る答えを見出せなかったのです。親鸞聖人の教えで、その心配とおそれを取り除いてくれました。とくに日本に行って明確な答えを得、すばらしい体験でした」とゆっくりした口調で話してくれました。

遍歴の果ての仏縁——スイス・親鸞

「私は親鸞聖人にいつも勇気づけられています」と、シュビリエさんは、聖人の魅力を語った。「聖人は偉大な人道主義者です。他の人間と全く同じ生活をしたが、すべてを自己の内面で解決していた人です。心の中に調和があっておごることがなかった。愚禿と自分のことを呼んでいます。その教えは弱い人にも開かれている。イスに坐っていなければならない私には、親鸞聖人を知ったことは大きなよろこびであります」

シュビリエさんは車イスの人なのに、なぜか精悍な印象を受けた。ジュネーブ大学の経済学博士の肩書を持ち、四年前までは銀行の調査員だったというが、おそらく行動的なビジネスマンだったのだろう。事故のため両足の機能を失っただけでなく、妻子とも別れるという不幸に会ったがそんな暗いカゲはどこにもない。彼が聖人の教えで特に強調したのは「弱い人にも開かれている宗教」という点であったが、日本の他の仏教にも詳しく、禅宗や真言宗にもふれた。夫々の長所を評価しながらも「禅や真言宗はやはり体力と、精神的な忍耐を必要とするが、残念ながら私のような者には近づくのは絶望に近いと思いました」と語った

ジュネーブの真宗グループには、スイス浄土真宗教会の会長のエラクルさん（四十五歳）が重要な役割を果している。彼はカトリックの神父だったが、親鸞聖人を知って浄土真宗に転宗した人で、スイス教会の実質的な創立者で、この人もホテルへ訪ねてくれた。エラクルさんは、白の丸首シャツに紺のスーツ。手ぶらで、フラッと立ち寄ったかっこうできた。彼は先ず

「当然のことながら私の場合、カトリックから仏教へ、長い時間をかけた精神の革命があったのです。仏教の世界観を知ったとき、キリスト教のそれがせせこましい狭いものだと考えるようになった」

という。色白で、おだやかな笑顔はいかにも元神父さんの感じである。しかしその話を聞くと涙ぐましいまでの努力を重ねて親鸞聖人の教えにたどりついている。

いまでこそジュネーブの真宗グループは西本願寺のヨーロッパ教会の一つとして本山に登録されているが、これはごく最近のことである。日本人の指導者にめぐり会ったわけでもなく、ヨーロッパ人のエラクルさん、シュビリエさんらが、東海のはての親鸞聖人と出会った物語は、一つの現代の奇跡とも思える。

エラクルさんは、キリスト教の現状にあきたらず、ギリシャ、東方教会に興味を持ち、そこからさらに小乗仏教、

とくにチベット仏教に関心を向け、チベット語をマスターした。次に漢文を学んで中国仏教を研究し、最後に日本の仏教に到達した。十数年の遍歴の末ようやく聖人を発見したのだという。その間、エラクルさんは、正信偈、阿弥陀経などのフランス語訳を出版している。

シュビリエさんはここ三四年の間の模索だが、苦労は同じで、まず中国の道教に関心を持ち、ついで仏教を知った。そして聖人を知るとすぐにエラクルさんのグループに加わり、日本を訪問（三年前の一九七三年）、翌年には同様に聖人に関心を持ち始めていたトネイさんに助けられ、二人でアメリカのバークレー大学での西本願寺北米開教使主催の夏季講座に参加、二ケ月にわたってナマの仏教にふれている。エラクルさんが学究の徒らしい長い歳月をかけて着実な歩みをしてきたのに対し、シュピリエさんは身体が不自由になっても持前の行動力を発揮して、一気に聖人の教えに飛び込んだ格好である。それにしても、それぞれ頭の下がる求道遍歴である。

スイスの真宗教会は、メンバーは約三十人、二週間に一回集り、まずお経をあげ「なむあみだぶつ」をとなえてから経典の勉強をしている。現在は観無量寿経で、エラクルさんの解説を聞いたあと話し合っているという。お経は正信偈で、翻訳せずそのままテープにとったもので練習したそうで、翻訳では荘厳さ、ひびきなどのお経本来のリズムと伝統が失われるというので、日本式でやっている由であった。

エラクルさんによると、親鸞聖人は欧州ではほとんど知られていないが、いずれ注目するようになるだろう。第一に念仏往生という教義の簡明性を持ち、生活様式がどうであれ、わかりやすく受け入れやすい点をあげ、現代の欧州は文化の複雑性に悩まされているから、その簡明さが大いに寄与すると信じると彼は語っていた。

スイス教会の人達は、いまジュネーブに仏教研究所をつくる準備をすすめている。この教会には三人の若い出家志願者がおり、その人達のためにも文献はもとより、早く信仰指導の出来る体制を整えたいと願われている。ようやく種が蒔かれようとしているが、プロテスタントの聖地ジュネーブでどんな芽を出すであろうか。

（編者記）以上は渡辺さんの御骨折りで毎日新聞の記事から転載いたしましたが聖人の教えに驚き、信の芽が光っているのに心うたれます。

念仏詩抄

木村無相

摂取不捨のゆえに

親鸞聖人
末灯鈔に
〃真実信心の行人は
摂取不捨のゆえに
正定聚の位に住す
このゆえに
臨終まつことなし
来迎たのむことなし
信心の定まるとき
往生また定まるなり〃

摂取不捨のゆえに
摂取不捨のゆえに

摂取不捨のゆえに

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ここに居るぞ

老人ホームの一室で
血圧が悪くてヒトリ寝ていると
ナムアミダブツさまの
おっしゃるには
〃ここに居るぞ
ついて居るぞ――〃

はじめて知った
如来さまの居どころ
ねてもさめてもへだてなく
寸時もこの身はなれずに
〃ここに居るぞ
ついて居るぞ――〃

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ご信心さま

照らすなり
照らすなり
ご信心さまは
照らすなり
〃煩悩にまなこさえられて
摂取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて
常にわが身を照らすなり〃
照らすなり

照らすなり
ご信心さまは
照らすなり

お慈悲さまこそ
ご信心さま――
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

わからぬけれど

お浄土が
有るやら無いやら
わかるわたしじゃ
ありませぬ

如来さまが
居るやら居ないやら
わかるわたしじゃ
ありませぬ

わからぬけれど
〃まかせよ〃の

み名に南無する
ばかりです

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

夜になると

夜になると
如来さま
おなげき——

一日
ガサガサ
ゴソゴソして
わたしのしたこと
みんなダメ—

夜になると
如来さま
おなげき——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

聞きました

この世の悩みを
悩みつくして
この世の迷いを
迷いつくして
この世の業苦を
果しつくして
生るるあの世と
聞きました

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

生死厳頭を照らす光

花田正夫

かって私が岡山の医学生だった頃、入院した患者が全快して人々の祝福をうけ、満面の笑顔で御礼を云い乍ら家路につく人々もあるが、裏門から金色の霊柩車で音もなく消えて行く人々に度々接した。その度毎に深く省みさせられたことは、医学の限界を越えた人々のこころであった。

「人間は生れた限り一度はどうせ死なねばならぬ。人間の力や寿命には限界がある、あきらめるより仕様がないじゃないか。せいぜい平素健康に気をつけて、生きている間愉快にくらすのが何よりだ。死んだらローソクの灯が消えると同じさ、孔子聖人でさえ、生の従来するところを知らず、何ぞ死を知らんや、と手を挙げているではないか。そんなことを問題にしたってラチのあくものではない……」

という所謂世間の常識論者が多い。然しこれは死を他人事とし、自分は大丈夫と、自分の現在の健康の上にあぐらをかいている時の常識である、これも無理のない考えで

「太陽と死とは直視出来ない」と西欧の哲人も告白している通りである。しかし自分がその当事者となり、死に直面する時、それですませることが出来るであろうか。

医大の卒業前に亡くなった、友の最後のつぶやき「僕は医師となって病人の治療をと願ってきたが、その僕がこんなに早く駄目になろうとは！」との悲痛な声は、今なお私の耳底にひびいている。

ガン

長塚節氏が、喉頭結核と診断され、余命一年との宣告を受けた時の歌に、

生きも死にも天のまにまと平らけく思ひたりしは、常の時なりき

我がいのち惜しと悲しといはまくを恥じて思ひしはみな昔なり

と生死厳頭に立っての告白である。誰しもそうなりたくないし、また考えたくもないことながら、この一大事は一

人一人直面せねばならず、誰にも代って貰うことも、一緒して貰うことも出来ない。

最近、年配の人が、ポックリさんとやらに参って、長わずらいして迷惑をかけぬように、ポックリ死にたいと願っている人が多いと聞く。それも痛ましい願いであるが、果してそれが可能なのか、そうしたことをして自分の気やすめをしているだけではないか。又よしそうなれたとしてもそれでは動物の死と何の変りはない。

ここに、仏陀はこの生老病死の苦をわがこととされて、それに障えられぬ、生死を越える無碍の大道を御自らさとり、一切の苦悩はてしない人々を悲憐されて、生のよるべ、死の帰する道を与えようと大悲の御手をさしのべられている。そこに死の闇黒がひらかれて、浄土への新生を恵まれるのである。

大正十年に処刑せられた、鈴辨殺しの山田憲が、不思議にも信に気づき、獄中に訪れた青年学徒に

「大無量寿経の会座まさに終らんとするに際し、仏、弥勒菩薩に告げて曰く。

為得大利　為失大利

大悲を信ずる者は大利を得、信ぜざるものは即ち大利を失う。不肖（ふしょう）天下に罪あるも、本願は悪人を正機と喚び給う。ここにいたって、報謝の称名相続せざらんと欲するもあに得べけんや。

嗚呼、有難きかな煩悩即菩提の境、御来所を深謝す」

と書き送っている。又法友に寄せた手紙に、

「……ただ有難いことは、私の影が薄くなるだけ、弥陀の影が濃くなってまいります。……お慈悲を信ずることが浄土に生れる因であります。有難く御恩報謝の称名を相続させて頂くことが、私の生活の全部であります」

と述べている。

京都時代に、法友の治田久さんが胃ガンで亡くなられる前に、枕頭にお見舞いした私共に向って、一人一人をしげしげとながめ、うなづきうなづき

「夢です、みんな消えます。

みんな来るんですよ！」

と云いながら、無垢な微笑をたたえていられたのに接し、この世を夢と感じられる治田さんの眼に、浄土のまことがいよいよ輝いているのに、心うたれました。

博多の万行寺の七里和上を尋ねた或青年が

「お浄土は本当にありますか？」

とお聞きした時、

「この世がたしかなと思っている時、浄土は夢幻に思えるだろう。この世が夢と感じられる時、浄土はたしかに拝めるものだ」

と答えられている。私共は、目に見、耳に聞くから確かであるときめているが、更に省みると、その感じたものは、

自分の心の影にすぎない、そしてその影におそれ、或はよろこんでいるにすぎない。「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」との歎異抄の聖人の仰せは、そこを明らかに知らされる。

今回の大戦で、中国に出征して、全員戦死を覚悟した最後の突撃を前に書きのこした無名戦士の句に

たすからぬ身にしみわたる御名の声

とあった。たすからぬ身、そこに何の光があろう。ただ死にたくない、淋しいつらい悲しいより外にない身に、一っ身になって下さる仏心の大悲は、御名となって内から浮かび出て下さる。そこに行く方の闇が破られてくる。この信境を、案じつづける故郷の母に告げずに居られなかったのである。彼は遂に戦死したが、母への無上の捧げものをのこしたのであった。

最後に、池山栄吉先生の、地上での最後のまとまったおことば、それも、友子夫人が耳を寄せて聞きとって下さったものに、

何もなくなる、何もなくなる
お念仏だけがのこる
お念仏だけがのこる
えらいこったよ、
ありがたいこったよー

とある。体力がおとろえ、とぎれとぎれに、かすれ声で仰言ったのであるが、お顔には微笑が浮かんでいた由をお聞きしている。御生前に「ただ念仏のみぞまことの、ただは、玉石混合をより分ける節（ふるい）の働きがある」と言われたが、まことなる念仏の不滅の光明を身に受けられた衷心からの渇仰讃歎のことばであった。

聖徳太子がお家庭にあっての常持語は

世間は虚仮なり　唯仏のみこれ真なり

であった。これも佛の真実のひかりを身にうけられて、自然にうなづける一味の世界で、そこに広大無辺の光明の大海がひらけている。

江州の綺田（かばた）の源通寺老院の遺偈に

七十年何の成す所ぞ
都（すべ）て空事、戯事のみ
唯一句実在するあり
南無阿弥陀仏

とある。煩悩に曇らされて、そらごとにのみかかりはてる身にきびしく、強く省みさられる金句である。

あとがき

きびしい寒波も三月になってやわらいできました。私の病中の日記に、遠くで鳴く蛙の初音に驚いて、

春光のようやくしみて初蛙

と駄句一つ誌したことがあります。そこに遠く深い仏心のまことに催されて浮かび出るお念仏のこころにふれたのでありました。

私共は、自分のことが自分の力で始末のつかぬ身であります。そこに「仏心に遇う」こと一つが道のひらける源になりますけれど、悲哉、智目、行足の無い身とて、法華経の長者窮児の譬喩適りに、親を知る智慧もなく、求めようともしないで我見、我慢に支配されて空しくさすらうのが定めであります。幸にもかかる私共に、遇禿と名告られ、十悪遇痴と告げられて、同坐して下さり「他力の悲願はかくの如きわれらがため」と仏心を仰がせて下さる租聖の導きがなければと、思ってさえ身の毛のよだつおそろしさであります。どうか、私共もこの春の初蛙と同様、心の春を迎えさせて頂きましょう。

高千穂徹乗師の一文は御在世中に頂いた刷り物から転載させて頂き、亡き師の信徳に浴させていただきました。

一道会の記で私の話は、十二月号に自分でまとめて出しましたので省略させて貰い、田村さんのお話に移らせて頂きました。御諒承願います。

スイスの真宗教会の一文は、聖人の教があちらの志ある人々の心に強く深く滲透して行く有様を、毎日新聞の記事から抜き出させて貰いました。

福岡県の金丸照子法姉からの近信に「私が佛を信じながら俗諦がまもれませぬ、悲しいことです」と近角常音先生に申しあげた時「君、信ありや、我はなし。信なき我を捨てぬ親だ」と、厳しいご意見を頂いたのを、今日病篤くなって始めて強く思い知らされます、とあり、お念仏の至極の味わいを頒って頂きました。

御紹介

意訳 歎異鈔 定価、五百円、送料百二〇円

佛と人 定価、千五百円、送料二百円

発行所 京都市下京区堀川通花屋町百華苑

振替 京都 二五七八八番

〈御案内〉

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜午后一時半。南区駈上町二の八八、花田宅

市バス、新郊通り一丁目下車。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

名鉄、呼続下車

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午后昭和区小桜町二丁目四番地。

市バス、北山町、又は御器所通り下車。

慈光 第二十九巻 第三号 昭和五十二年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

定価 半年 七〇〇円（送共）
一年 一四〇〇円（送共）

編集・発行人 名古屋市南区駈上町二ノ八八 花田正夫
電話八二一局七〇三七番

印刷人 愛知県西加茂郡三好町大字福谷 坂部光雄

発行所 名古屋市南区駈上町二ノ八八 慈光社
振替口座 名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七